

三浦相撲と三浦半島出身力士略記

高橋 恭 一

一、三浦相撲

江戸に宝暦以後勸進相撲がはじめられてから各地に素人相撲の流行をきたし、特に江戸での辻相撲の流行によって、これが地方草相撲の發達を促すにいたったものであらう。

三浦半島でも御多聞に漏れず、神事相撲としての草相撲が行なわれ、三浦相撲と呼ばれ地方に於ける地相撲の雄たるものであった。⁽¹⁾

三浦市初声町下宮田の鎮守若宮明神社の八月十八日、横須賀市内の諏訪社の七月二十六日、横須賀市大津の諏訪社の七月二十七日は昔から有名で、そのほか横須賀市内の長坂の祖母神社、山崎の春日神社、坂本の大六天社、不入斗の御嶽社、浦郷の雷神社、武山の不動堂、衣笠公園の招魂祭や葉山町の森戸明神などに奉納されたこともあった。⁽²⁾ これらはなかなか盛んなもので人気を呼び遠近から老若男女が押し寄せたものだったといふことである。これらが所謂三浦相撲と呼ばれた地相撲であったのである。

この三浦相撲の起原について判然としたものは何もないが、勿論宝暦以後であることは申すまでもない。三浦相撲の發展は横須賀市長井の出身錦島三太夫が始祖だといふ説もあるが確かそれ以前からであらうと考えている。しかしこの錦島三太夫と三浦相撲との關係は非常に深く、その發展に彼の力があずかって大きかったことは申すまでもないことであらう。彼については後に記すがもし彼が三浦相撲の始祖だとするならば、その時期は化政末期か弘化の初期だと思われる。

しかしこの錦島とは別人の錦島三太夫の墓というのが三浦市南下浦町三崎街道初声町に通ずる三叉路の分岐路傍にある。この人は寛政五年に歿し、この墓は歿後八年目の享和元年に建てられたもので、しかもこの台石に彼の門弟として三浦郡をはじめ鎌倉・藤沢などの力士名が連ねられている。これからみれば三浦相撲の始祖をこの方の錦島とし起原を宝暦の頃にまでもっていった方がよくはないかと考えているのである。無論横須賀市長井出身の錦島は三浦相撲發展の大功労者であることは充分に認めるが創始者の存在ではないような気がし、同じ名の錦島ではあるがこの

三浦市の一廓に残る墓の錦島こそその創始者であろうと考えたのである。

江戸時代の三浦相撲の状況を物語る資料として今日何もないが、ただ大津諏訪社に残るものに次のようなものがある。

乍恐以書付御伺申上候

一 御陣屋八幡宮御祭礼来ル十五日有之趣之由ニ御座候処今般江戸相撲年寄桐山権平鎌倉へ通行之折柄門弟共十四五人召連八幡江稽古相撲奉納仕度段我等共迄申出候間此段以書付御伺奉申上候間宜敷御差図奉願上候以上

安政五年十月 日

大津村名主 由井五郎兵エ

小川三郎左エ門

藤原勘右エ門

永嶋庄兵エ

前書之通相違無御座候ニ付奥印仕候以上

御郡

御役所

右の文書は、大津御陣屋にあった八幡社でその祭典に際しての奉納相撲で、土地の諏訪社の神事ではないがいろいろの意味で貴重な資料だと思われる。この桐山は本県の相模地区の支配者で当時各地の支配権をもっていた。しかし三浦地区は錦島の支配下にあったものである。

さて三浦相撲は明治になってから次第に盛んになり、殊に明治三十年代から昭和四・五年ころまでが最も盛んな時期で、就中大正の四・五年代が何といっても全盛期であったといわれているのである。明治三十年代には平作の諏訪の森、長井の和田の森、林の玉錦などが世話人として若い連中を指導し、その後は佐島の島の森、一騎塚の滝の川、佐島の綾浪、久留和の綾錦らが順次三年交代で世話人として三浦相撲を育て上げ強い力士を世に出した。当時は力士数五、六十を数えるにいたったということである。

当時の力士には前記世話人以外に入船・夏島・山田川・荒初・荒勝・荒高・一ツ石・白浜・走船・常川・早勇・黒石・葉山崎・高勇・浦ノ越・剣乃・大松・三崎洋・和田ヶ崎・小所浜・春日森・大岩・花泉・佐野ヶ崎・松嵐・熊野川・友綱・朝日嶽・相模灘・鹿島洋・牛尾灘・八幡浜・木村源司などあった。⁽⁵⁾中でも綾浪関は四十八才まで大関をつとめた立派な力士で三浦相撲発展の一大功績を残した人であった。

当時三浦相撲から東京相撲入りした横須賀市出身の谷の川安藏が、未だ二枚目に入ったばかりであったが本職として堂々五つ紋姿で東京相撲の賈録充分、馬車に乗り込み肩で風を切って大津諏訪社の奉納相撲の土俵にやって来た。時は八月二十七日。かねてから谷の川と三浦相撲の総帥綾浪との一騎打を報ぜられていたので、今日こそこの一番を見んものと遠近からの観衆はその数を知らずという未曾有の人出であった。いよいよ呼出しの声に群集のどよめきは一瞬にして水を打ったよう。土俵上の両雄は谷の川として東京相撲の面目にかけても負けられず、片や綾浪とても三浦相撲の伝統にかけて勝を譲れず立ち上り、ざま火の出る熱戦を展開し観衆を酔わしたが、遂に軍配は綾浪にあがった。

齒をくいしばり满面蒼白土俵をおりた谷の川、いつかは綾浪をと復仇の意気火よりも物凄く打倒綾浪と毎日猛烈の稽古がはじまった。翌九月八日葉山町森戸社相撲の日が来た。この時とばかり谷の川は復仇の意気強く土俵上縦横無尽の活躍で遂に綾浪に土をつけ、堂々東京相撲の名を恥かしめなかった。谷の川は明治三十六年五月に入幕し、その時綾浪を招き綾浪関があつたればこそ稽古をはげみ入幕の榮をかち得たと感謝したということである。

この綾浪は錦島に師事し、三浦相撲の総帥の座に据つた人で、横須賀市佐島谷戸芝五〇の福本常吉という漁師である。今や既にこの人なく今また三浦相撲の名なきは遺憾の極みである。

世 話 人 免 状

一 貴殿儀是迄拙者門弟ニ差加エ置候処精勵勤務被致候ニ付更メテ世話人ニ取立候就テハ大相撲興行ノ際ハ勿論祭典相撲ト雖トモ速ニ出勤世話方可被成候且其他ノ相撲並出張ノ際タリトモ斯道ノ作法ヲ遵守シ専横ノ行等被成間敷候事

右之条違背無之ニ於テハ何国迄モ拙者門弟世話人ニ相違無之候依テ免状如件

明治四十年八月吉日

錦 島 三 太 夫

綾 浪 常 吉 殿

この免状は福本家の家宝とされている。

三浦相撲はかつては毎年定期的に催され、五月廿五日の佐原太子堂を皮切りに七月三十日山崎春日神社、八月十五日金谷の大明寺、同月二十七日大津諏訪神社、同二十九日不入斗御嶽社、翌三十日木古庭の不動堂、九月は八日が葉山の森戸神社、十日が浦郷、十八日が宮田、二十一日が長

坂で打ち止めという順であった。この間にも臨時に依頼され衣笠公園での招魂祭、浦賀、諸磯などでも打ったということである。

この外、県内の各所藤沢とか伊勢原とか山北とかなどにも出掛け、またはるる東京湾を渡って房総にまで遠征を試み数々の逸話を残している。

三浦半島での各地の土俵は錦島の支配下にあり、これらで興行する度毎に主催者と世話人と話し合いがもたれ出場力士数によって興行料金を折り合い、その内から土俵金として錦島部屋に納め、残額から諸入費を差引き残りを出場力士に配当することになっていた。明治三、四十年ごろは一人一日の配当が一円内外であったということである。

大正に入ってからにはなかなか盛んで相生・一ノ藤・港川・一港・和田の森・吉田川・中ノ川・綱錦・久野・下里・花泉・真竜・北ノ海・小桜・錦洋・岩勇・栃ノ森・雷ノ峰など多士濟々であった。⁽⁶⁾ 雷ノ峰の如きは後に記すように幕内にまで進み、栃ノ森は当時華やかなりし海軍軍人の相撲指南にまでなった人である。

昭和になってからは次第に衰え、その前期には浦島・中ノ川・高田原・常磐・北ノ海・武ノ腰・一港・勢力・港川・剣山・相ノ関・武錦・若鹿島・栄竜・相ノ峯・下里・若ノ花・武ノ里・羽後ノ浦・清水川・新倉作⁽⁷⁾らが代表的な力士であり、後期になってからは男山・衣笠山・不動岩・若汐・八幡島・小田ノ山・新大津・武ノ浦・榊島・大和錦・堀ノ越・若錦・当塵・隔田川・秋葉・浦島・紅林・真砂石・今野・浦ノ原・榎田・徳田・堀江⁽⁸⁾などその雄たるものであった。

二、三浦出身の力士

(一) 錦島三太夫

既に記したように三浦相撲の功労者として初代と思われる錦島三太夫をあげなければならない。しかし彼については今や何ものも知る資料なく、ただ三崎街道初声への三叉路角に残る墓碑によるほかはないのである。これには正面「錦島三太夫墓」とあり、右側には「開眼師妙音寺降法享和元酉四月建之」と三行に彫られ、左側には「江戸年寄石ヶ浜更メ錦島三太夫 願主大石蔵助・式守長五郎・崔ヶ浦伝吉 寛政五丑歳四月九日」とあり更に「三浦郡鎌倉藤沢相撲門弟中」と、彼の歿年及び建碑に関係深い人を残している。台石正面には「北浦賀道西鎌倉道南三崎道」と道標的役割を演じて方向を示し、台石の横には「世話人 上宮田吉田左エ門・長島太左エ門・松原新左エ門、浦賀角井甚右エ門・伊勢屋喜八、



初代錦島三太夫墓

飯森高梨角右エ門、地主高梨佐平次、名主三留喜左エ門」と八名が刻されている。

さらにその下には門弟と考えられる力士名が数多く列記されているが風化が甚しく全部は明らかでない。この墓碑に刻された歿年からみてこの錦島が恐らく初代であるらしいといわれている。相撲博物館の池田雅雄氏が国立浪夫の名で「古今相撲部屋変遷史」を書かれているが、その中にある錦島部屋の条を引用させて頂くと「錦島三太夫という美しいすわりのよい名も初めはやはり力士名で、年寄一門の名称となったのは、寛政時代からである。古番付には宝暦七年頃幕下筆頭にその名がみえ、宝暦末年発行の相撲大全には江戸年寄桐山権平弟子錦島三太夫と記されているから、この力士が最初の人であろう。つづいて安永四年六月の芝愛宕山勸進大相撲にその名が見える。この錦島が寛政時代の年寄と同一人であるかどうか確証はないが一応初代として話をすすめていく。」云々とある。しかもこの人の墓は京浜急行沿線南馬場の妙蓮寺にあり歿年は寛政五年四月九日で、寺でも初代としている。従って三浦市の墓碑錦島三太夫はこれと同一人であるので初代錦島三太夫としてよいであろう。

さてこの初代と目される錦島の出身地はどこであろうか。今やこれを知る何らの手掛りもないが恐らくこの墓碑を中心に考えると三浦半島のことかであろうことがおしはかられるのである。彼は宝暦七年十月場所から安永八年六月の花相撲までの番付にのっている。共に幕下力士でさほどの存在ではなかったが引退後は年寄として活躍したものであろうと思われる。

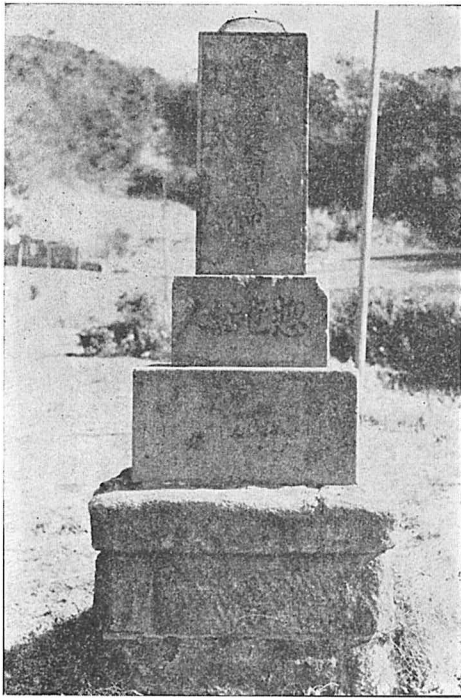
(二) 後の錦島三太夫

錦島三太夫を継いだ二代目は力士江戸ヶ崎で三代目が網代木力蔵である。四代目こそ横須賀市長井町井尻の産である走り船猪牙右エ門である。同市内大桶地区長坂の鎮守祖母神社近くに建てられた供養の墓碑こそ彼を語る唯一の資料であろう。

この碑正面には彼の法名「志念院堅固日常信士」と刻し、左側には「錦島三太夫墓」「当村無量寺拾六世黄菅開眼」とあり、右側には「維時明治元戊辰歳六月二十七日」とその歿年をとどめている。台石は二段にて上段には「三浦門弟世話人」と見え、下の石には二ツ橋元八・長坂荒川藤

蔵・ヲキノ重石嘉石エ門・太田若柳左兵エ・平作三ツ石政吉・ヤ戸錦浪仙蔵・佐原錦川卯之助・ヤベカ石佐吉・同荒獅子新太良・長坂錦岩松五良・久ノヤ岩洞熊吉・長坂宮森元吉とある。台石の左側を見れば上段には「長井村井尻里安西氏産」と彼の出身を明らかにし、下段は前記正面より続き「サシマ錦形留吉・同華車安五郎・同名取川取蔵・同白浪為吉・浦賀伊勢ケ浜白蔵・久ノヤ岩ケ島八十吉・ハマ早瀬川荒吉・同小松石仲蔵・上山口箱岩利三良・金田勇洋市蔵・長井入船定吉・同白石勘治良・同浪嵐利助・タケ和田ケ崎金蔵と門弟二十六名の名を挙げてゐる。台石右側は「長坂村世話人福本周右エ門・石渡六左エ門・長坂荻野若者中」とみえ、裏面は建碑について「大正二年九月二十一日五十年祭執行世話人長坂白浜留吉・サシマ綾浪常吉・長坂青年一同」と、五十年祭を執行しその時追善供養としてこの墓碑を建設したことがわかるのである。

彼は三代目錦島三太夫の弟子となり天保十三年二月に序の口としてデビューし同十四年十月師名をついで錦島藤蔵と名乗り二枚目に昇り、さらに弘化二年三枚目について錦島三太夫と改めている。同四年には幕下に昇進、しばらく中軸どころを上下していたが嘉永五年の春場所幕下どん尻に張出され、これを最後として引退、師の後を継いで年寄専務となつて後進の指導に当り、ついに慶応四年（明治元）六月二十七日に歿し、錦島歴代の菩提寺妙蓮寺に葬られた。彼は現役中下位にあつたが兎に角錦島一門の総帥となつたのをみると非凡な人物であつたのではなからうかと考えられる。



四代目錦島三太夫墓

(三) 外ケ浜浪右エ門

本市野比出身の外ケ浜という力士があつた。野比の一、九五六番地が彼の出生地でもあり育つた場所でもあつたが、既にその家もなく血縁の人も残っていない。附近の人たちは「外ケ浜は大坂の鴻池のお抱え力士となり大坂で死んだ」とか「或日彼の母が露天で据風呂入浴中、にわか雨となり困つて居ると彼が外に飛び出し、母が入浴のまま据風呂桶を家の土間にまで持ち運んだ」などと伝えてゐるに過ぎない。

彼は外ケ浜浪右エ門といい後に沖津風と改めたこともあつた。初め江戸の春日山鹿右エ門の弟子となつたが後に大阪の陣幕長兵エ門下となり、三都で相当名を挙げている。沖津風からまた外ケ浜浪右エ門と再度改め天明

四年まで土俵をつとめたといふ(10)人だが詳細は明らかでない。安永六年四月に入幕しこの時から沖津風浪右エ門と名乗り、同八年十月の番付から再び外ヶ浜に改められている。

(四) 岩男浪磯吉

岩男浪磯吉は西浦賀の出身だといふが詳細に調査するに足る何等の資料もなく甚だ残念なことである。市内平作の日蓮宗大蔵寺(といふよりも瘡守稲荷といつた方がわかりがいい)の稲荷社はこの岩男浪が病氣療養のため大蔵寺に寄偶し、そこで正一位稲荷にその平癒を祈願し快癒の御礼にこの地に稲荷を勧請したものだといふと伝えられ、同寺にその間の事情を物語る証書が残っている。包装の表には「稲荷社安鎮之証書 松本筑後守」あり、中の証書には「正一位瘡守稲荷大明神安鎮之事 文化元年七月豊吉 城州紀伊郡本宮祠宮 正四位下秦筑後守為房 浦賀岩男浪磯吉」と書かれている。

病氣平癒した彼は瘡守稲荷勧請の翌年文化二年の二月から番付にその名が見え、同五年十月には幕下六枚目となり(これが恐らく彼の最高位と思われる)、同六年二月には磯吉を改めて岩男浪弥七と名乗っている。

(五) 相模灘伝吉

次に相模灘伝吉をとりあげてみよう。彼は文化四年十一月に三段目として初めて番付にのり、文政二年を最後としてその名を番付から消している。市内鴨居一、四九三番地(現木村勝治)が彼の生地で墓も同じ鴨居の曹洞宗能満寺にある。この墓には観応禪頂信士・香水妙海信女と正面に刻し、左側には観山道喜信士、右側には寛山勇力信士とあり、台石に大きく相模灘と彫られている。正面二霊の法名は彼の両親ので左側は兄右側が彼の法名である。恐らく彼が両親のためこの墓を建てたものであろうと考えられ、その後この墓に彼の兄及び彼の法名を刻したものであろう。彼の歿年は過去帳で天保十三年寅正月十六日と知れる。

彼の引退披露のため故郷の浄地原(古書は常芝原)で相撲興行のことを役所に願ひ出た文書が筆者の手もとにある。次に示せば

乍恐以書付奉願上候

一 当村八右エ門弟伝吉と申すもの三拾ヶ年已前より江戸角力に相成相模灘と申候処最早年来故角力も段々相衰ひ申候間在所江引込申度候ニ付角力中江相咄し候処然は在所ニ而名残角力致候ハ、為取統銘々祝義致呉候由ニ御座候尤首尾能引込在所ニ而名残角力致候節は角力取仲間方式百文三百文或は式朱疋分とも祝義致呉候儀は相楽に致来申候此度当村字常地房原ニ而晴天七日角力興行仕度段願出候ニ付村中江申聞候処

一同申合相談仕候得は兼而浦祭り致度奉存候処ニ御座候間村中御祈禱浦祭り旁々角力興行為致奉存候間当春中之内角力興行御免之儀御願被成下置度候様村中ニ而も一統申合願出候ニ付御願奉申上候木戸は打不申候得共好氣之者又は志し之方る五拾文百文づゝ御力受候而已村方若者世話人ニ至迄貫き出錢致候儀一切無御座候

一 常地房原之儀は往昔五太夫と申角力取始而芝訳仕晴天七日之角力に勝取候に付閑取に出世仕候誠に手柄之角力に御座候故右原を今に五太夫ケ原と角力中は相唱申候而三ヶ之津同様角力取出世之原に相成申候且又御先領之砌浦方繁昌致候節は年々右原に而浦祭りに角力又は芝居興行仕候近年浦祭り不仕候故に大漁事無御座一統相敷き大漁而已申相待居中候此度相模灘伝吉在所引込為相統之名残角力村中に而は御祈禱之角力先年之通浦繁昌致候様漁祭り旁々角力興行為被仕度奉存候間何卒御慈悲を以右於庭所に角力興行御免被成下度仰々奉願上候右願之通被仰付被下置候はば重々難有仕合に奉存候尚又日限之義は被仰付候上に而角力取之間ヲ見合定日相□□御願奉申上度奉存候間格別之御憐愍被成下置候様偏に御願上候

文化十一年二月

以上

鳴居村

願	人	八	右	エ	門	印	
同	相	模	灘	伝	吉	印	
百	姓	代	伝	右	エ	門	印
地	首	新	兵	エ	門	印	
同	甚	右	エ	門	印		
名	主	嘉	兵	エ	門	印	
同	青	木	松	兵	エ	門	印

御代官様

とゆうのである。

（六）谷の川安藏

時代は新らしくなるが明治二十三年から四十一年にかけて活躍した本市浦郷町（本浦）一、二八九に明治四年三月生れた谷の川安藏がある。彼は浦の越と名乗り明治二十四年に初土俵を踏み、同二十九年五月二十六才で谷の川と改めた。比較的小柄な力士であったがなかなかの手取りで有名だった。明治二十三年桐山権平に入門し同三十二年五月二十九才で入幕し、爾後二十場所をとめ前頭二枚目にまで昇った。当時は相撲界の全盛期といわれ梅ヶ谷・常陸山をはじめ大砲・国見山・荒岩・朝汐・太刀山・両国など有名な大豪を相手に相撲して彼は手取り力士として妙技を振ったというが、不幸にも稽古中足首を折って再起不能。三十九才明治四十二年一月場所限り引退し、年寄荒汐を継いで桐山一門を預り協会及び郷土奉納相撲などに寄与すること大きかった。死んだのは大正七年二月五日、東京本所の浄仙寺に葬り法名を義達院勝道日安信士という。

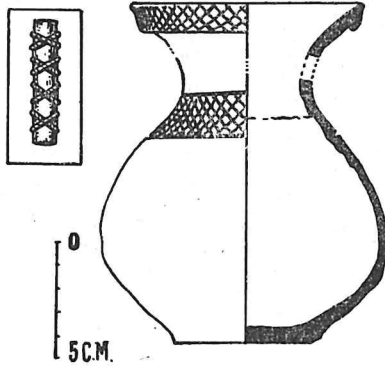
（七）雷の峰伊助

最後に雷の峰伊助であるが、彼は市内秋谷五、四七〇番の出身で、明治三十六年六月の生れである。大正七年十二月十六才を以って角界の名門雷部屋に入り初土俵は大正九年五月で十八才であった。身長六尺一寸二分、体重二十六貫の持ち主で前途を囑目され、二十三才の大正十四年五月に入幕し異数の昇進で昭和四年前頭三枚目となった。兎に角土俵度胸もよく吊りと突張りを得意として居った。

ところが昭和七年の春相撲改革という事件が巻き起り、彼はこの改革の革新派に加わり天竜一派と行動をともし、遂に協会を脱して関西に走った。不運はどこまでも彼につきまとい革新派も解散の運命に迫られ、仲間の半数以上がそれぞれ所属部屋に戻って協会に復帰したが彼は師匠雷（梅ヶ谷）に死なれ、復帰の機会を失い事情あって一時立浪部屋に移ったが面白からず、昭和九年五月三十二才を最後として角界を退き貸座敷を営んで居った。遂に昭和十五年五月十日九段富士見町の花街で急死した。享年三十八。枕頭に駈つけた同志天竜・浦風の二人だけに見守られ淋しく黄泉の客となった。市内久留和の円乗院に葬られ雷峯院徳養賢照居士という。

その他三浦半島出身力士もあるであろうが以上に留めてこの稿を終りたい。この稿を草するに際し御指導を賜った相撲博物館の池田雅雄・斎藤誠郎両氏に対し深く感謝して擱筆する。

- (2) 加藤山寿「三浦古尋録」(文化一一)
- (3) 相模風土記稿(天保一一)
- (4) (1) に同じ
- (5) (1) に同じ
- (6) (1) に同じ
- (7) (1) に同じ
- (8) (1) に同じ
- (9) 加藤山寿「三浦古尋録」(文化一一)
- (10) 酒井忠正「日本相撲史」(昭和三一)



横須賀市長井町北原出土の弥生式土器

長井町一〇八九富沢隆氏が所有地の字北原四一の畑を深耕中、地下七五cm付近から、多数の土器破片が出土したので、主なものを持ち帰ったということを横須賀市博物館勤務の押本源治氏が聞き、そのうちの一個を博物館に寄贈してもらった。図の土器がそれで、弥生文化後期・久ヶ原式土器に属するものである。本例で注意すべき点は、口縁部側面ならびに、肩部をめぐる二本の平行沈線の間には粗い網目形縄文の存在である。この文様は、図のように細い縄をかけたものであるかも知れない。類例は比較的になく、本県下では、現在次の三遺跡をかぞえるにすぎない。

横須賀市林・清水遺跡

横須賀市佐野町びわ山遺跡

鎌倉市山崎水道山遺跡

(神沢稿)